

質 疑 応 答

(荒木) だいぶ時間がなくなってきました。ご質問ないしコメントをフロアからお受けしたいと思います。どなたかお願いします。ご所属とお名前をお願いします。

(Q) 上智大学の師岡です。道上先生に1つご質問です。

大学として教育功績賞や研究功績賞をお出しになっているのは大変にすばらしいことだと思います。より具体的な評価基準、ここに3つ挙げられていますが、これをどう総合化して、だれがどのように功績賞をあげる人を決めているのか、教えていただきたいのです。

(道上) まだそういうものが出来上がっていないのですが、副学長を中心にしながら、去年の夏ころからやっているわけです。当然のことながらいろいろな意見があつて、副学長からは難しいと返ってくる。でもやらなければいけない。学長が「ちゃんとやるのだ」ということを言って、私がプッシュして出すわけです。何度も行ったり来たりしながらそんなことをやっています。

現在の状況を見ると、学長のメルマガを作っているのですが、そこでも、私の方からこういうことをやるのだと、皆さん方にはお知らせをしています。今、細かい詰めをやっているところです。我が大学は、教官の業績のデータベースをほぼ作っています。それに基づいてこれからやろうとしています。難しい問題はたくさんあるのですが、最初はあまり精緻なモデルは難しいので、多元的評価尺度…、要するにラフなものを作っていこうという考え方なのです。教育に関しては、何十項目ぐらいあると思います。

特に、研究などは比較的、外形的でやさしいと思うのですが、教育というのは非常に難しいのです。それで我々としては、先程もあつたように授業評価やFD、あるいは授業参観、またはセントラル・データ・ファイリングと称していますが、先生方のそれぞれの授業のコマ数、何人履修したか、そういうことを1つの指標にしながらやっていきたいと思っています。ほかにも例えば教材を作ったとか、いろいろなことがあります。

もう1つ大事なものは、教育というのはすぐには成果が出にくい。したがって、先程言つたように教育に関しては、特にプロセスを大事にする。プロセスというのはわかりやすくいえば、負担です。あるいは姿勢です。こういうものをできるだけ取り入れたような仕組みです。出来上がったらお見せしますが、残念ながらまだです。そういうところにフォーカスしながら議論しているという状況です。

(荒木) ありがとうございます。

では、それ以外にご質問なり、反対意見なり、コメントなり、お願いします。まだ1〜2件はお受けできます。

(Q) 私も小さな、定員割れの大学にいます。リテンションレートに今日は驚きました。ほかの大学ではどうなっていますか。

(濱名) ほかの国ですか。リテンションレートを非常に大きく使っている国はないのですが、ドロップアウト率は、OECD データベース2000でいえば、イタリアがひどくて67%くらいです。3分の1しか残らない。要するに失業予備軍を抱えている。日本の大学は公称11%です。それは、根拠はあると思います。それは本間さんの方がご存じだと思います。たぶん、入学年次から8年間はたぶんドロップアウトと計算していないと思うのです。今、データベース2000に出ているのは、8年前の入学者のドロップアウト率だと思います。それ以降は、私の実感では悪くなっていると思うのですが、昨年、私の同業者がやった調査ではそんなに悪くないという、回答にはなっていますが。

ところが、日本の場合は、私がリテンションの話をするとう「そんなに悪くならない」とおっしゃる方もいますが、一番大変なのは、大学に出てこなくなる。試験を受けなくなるとかという状況であり、ドロップアウトでは、首都圏

の大学の中には1年間で1000人以上の大学生が消える大学が現実にあるといわれています。特に日本の場合は、途中で中退することに対して社会的には非常にネガティブなサンクションを科せられるとこれまで見られていたのですが、今の大学生は必ずしも卒業を目標にしているとは限りません。それと、他大学への編入学が可能だという考え方があります。大学院で他大学にトランスファーしていきますので、入った大学に必ずしもロイヤリティがない。現行大学設置基準は、理論上は4分の3、他大学等々で取った単位を基礎にすれば、残り4分の1その大学で取るだけでも卒業できる。単位制授業料の学校でいえば、単位認定料を払えば、ある程度、他大学の単位を認めるかたちを取っていますので、いつの段階でリテンション問題が日本で火を噴くか、私は風前の灯火だろうと思います。

日本のリテンション率は今までの状態でいえば、他国と比較して高い状態で来ているということではありません。

(荒木) どうもありがとうございました。

どうぞ。

(Q) 神戸女子短大の水島と申します。

どなたでも結構ですが、明るい話…。つまり、日本は今、政府もだめ、企業もだめ、大学もだめで、小中高もだめで、これだけだめな話を聞かされると、若い人には当然、夢がなくなる。だめになるのは当然です。国際的にいろいろ詳しい方もおられますので、日本のここはいいとか、よくなりかけているとか、若者に夢を与えるような芽があるのか。そういうものを持たないと…。「だめ」はすぐに見つけやすい。だから夢がないと暗くなるので、日本の教育のここはよかったとか、よくなりそうだとか、見直せばとか。そういう若者に夢を与えるような話はありませんか。

(濱名) どれだけ芽が出るかはわかりませんが、逆に弱点は長所の種でもあると思うのです。例えば、先程の赤岡先生の話でいうと、アルバイトを単位認定する国家はあまりないと思います。それは可能なのです。非常にフレキシブルな制度をつくっているのが、皆さんがあまりお手盛りで水準を下げていくと、高等教育に対する信頼性は国際的にも国内的にも失われると思うのですが、それをどういうかたちでやるか。リテンションが問題になったときにどんな手を使うかという、個人の尊重とグループ体験です。グループで集団体験をさせる。日本の大学教員の場合は、学生が勉強をしないのはやる気がないからだ、けしからんという、いわば学生に対する性善説を立てているのですが、アメリカでは性悪説なのです。性悪説に立っていると、いかにしてシステムティックに学生たちを引っ張っていくか。そういう工夫をすれば日本の大学でも、単位制度の柔軟性など、制度的な柔軟性というのはいろいろな可能性を持っていると思います。

ですから、私は個人の尊重と集団学習と体験をどう組み合わせしていくかということで、芽はあると思います。赤岡先生のお話の中にも、そういうヒントがたくさんあったのではないかと思います。

(道上) 私も大体同じ意見です。今、うちの学生を見ると二極分化しています。非常に優秀な子、そうでない子、真ん中がないという感じです。優秀な子とはどういうことかという、キャンパスから出ていく。鳥取には、ZITというインターネットのクラブがあります。今、600人くらい入っているのですが、学生がかなりいます。それでいろいろな議論をやっています。そういう連中は、大抵はベンチャービジネスを何本も起こしています。そういう非常に優秀な学生もいます。

それからまた、京都大学の学内は、私も入ってきたら少しよごれているし、整理もよくないと感じました。鳥取大学はものすごくきれいです(笑)。これは学長がいいからではない。学生がやるからです。副学長にそういう人がいますが、美化委員会をつくりまして、お金も出しましたが、キャンパスの中が非常にきれいになりました。それから部室の周りも汚かったのですが、それも彼らがいろいろな美化組織をつくって芝を植え、ものすごくきれいになりました。そういう連中は非常に学力も優秀です。そのように非常に優秀な芽も出つつあります。これはキャンパスから出ていけば、いろいろな人や先生との出会いがあり、それが動機付けとなっている。やはりりっぱな先生がたくさんいれば、いい出会いがある。先生にも問題があるのです。もう1つは、同じような格好で、無気力な学生もいる。このウェイトは大きいですが、非常に優秀な子も最近出てきているのは希望がもてます。例えばISO14000を受けな

いかと、学長の私のところに言ってきた。僕らはどういふサポートができるかということで今、研究会をやろうとしています。学生ですよ、先生は言ってきませんよ。

このように非常に優秀な子もいて、二極分化になっているというのが私の感じです。

(Q) いいというのと、悪いというのがあるとき、マスコミなどのとらえ方では、悪い方が大きくて、悪いイメージが若い者に流れすぎているのではないかという気がします。だから、いいところをどんどんマスコミがちゃんととらえれば。

(道上) それはそれぞれでしょう。例えばベンチャーとかいろいろなことをやっていますから、マスコミもどんどんそういうのを取り上げるようになっていきます。特に田舎はあります。東京は無理だと思いますが。

(濱名) 先程、私が使わせていただいた柳井先生のデータでいえば、上がっているのはコンピュータの活用能力、情報とプレゼンテーション能力は10年前より高まっています。ですから、おそらく総論的に考えていくと、我々が想像しているよりも、火のつけ方とか仕掛けをきちんとつくってやれば、最初の目覚めというか、きっかけを与えてやるような教育システムをつくれる大学は成功されるのだろーと思います。アメリカを見ていても、ほとんどそうした仕掛けです。

そうでないと、非常に熱心な個別の先生方だけの話ですと、私が関係している学会に行っても、まじめにやっている先生ほど最後は嘆きになる。私はこんなに努力しているのに学生はこうなのですよ、苦しい雄叫びが聞こえてしまいます。やはりシステムティックにそうした設計をすれば、学生たちのポテンシャルの質が変わったということだけで、明るい芽の可能性は私もあると思います。

(本間) 1987年1月に京都でOECDの教育大臣サミットというのが開かれました。当時の中曽根総理大臣と塩川文部大臣が来られて、私もその準備をしていました。冒頭、中曽根総理が「我が国の教育は荒廃の極致にある」と言われたのです。当時は臨教審があり、いじめが増えていたというようなことでそう言われたのです。くしくも私が京大に来る直前に、文部省で政策調整の仕事をしていました。G8の教育大臣サミットを東京と沖縄で開いたのです。そのときの文部大臣が中曽根弘文先生で、私が中曽根先生のスピーチを書く仕事をしていたわけです。どうしても政治家は、「日本の教育には問題がある。したがって、欧米先進国から知恵を集めて…」という放送で発言をされるのですが、できるだけそういうトーンは払拭しようと努めたわけです。

私が政策調整の仕事をしているときに、ロンドンでOECDの教育大臣の若年者雇用の問題に対する閣僚級会議があり、大臣の代理で行ってきました。このときの発言を聞くと、アメリカには刑務所人口が200万人いて、このうちの4分の1が青少年である。それからイギリスなどの話を聞くと、新聞が読めないファンクショナル・イリテラシー(機能的文盲)が、もちろん移民の方がおられるから別だとおっしゃるかもしれませんが、約500万人いる。こういう人の解決が最大の課題だという話が頻繁に出るわけです。

かつて私が高等学校課長をしているときに、高等学校中退が2%、10万人を超えて、私が記者会見をしたわけです。そのときに新聞記者からぼろくそに「文部省の責任はどうなのだ」と言われたのです。ただ、10万人のうちの半分は専門学校に進路変更をしたとか、病気になったとか、お父さんの会社がつぶれたということです。専門学校へ移ったなどというのは前向きな話です。それにしても、文部省の責任が非常にあげつらわれた。しかし、私は欧米から来られる先生や教育行政界によく話をさせられますが、まず高校中退2%と言った段階で、アメリカで20%に抑えたら校長先生が表彰されますと。そういうレベルの国が、先進国も含めて圧倒的なのです。だから今の日本の学力低下、学級崩壊がいいと強弁する気はありませんが、物事はパーフェクトにはいきません。特に教育はそうなのです。そこを日本人のあまりの潔癖さの基準で考えて、悪い悪いというのが、またマスコミの悪いところなのです。

日本自身が自信を失っている大部分、例えば「日本人は英語力がない」と実態を見ずに平気で言う政治家、それに乗るマスコミ。もう少し自分たちの持っているものを見て、そして基本的に情報発信をすることが一番基本になると思います。私もいろいろ京大のことを言いましたが、改善をしたいから、ここが悪い、最低最悪という表現を使った

のであって、京大のすばらしさは言わなくてもわかっていると思うから、あえて言いませんでした。

やはり日本人全体が、そういう前向きな発想を持っているのです。でなければ、土曜日にこんな勉強会にこんなに沢山の人が集まる国などない。私の知っているフランスであればどこか遊びに行つて、休みの日に勉強などしていません。ここにこれだけの人がいるということがすばらしいことです（拍手）。

（荒木） 今のようなことでよろしいでしょうか。技術的な種があるとか、エンジニアリングとか科学サイエンスの方でしたらいろいろ申し上げたいこともあります、それは省略させていただきます。

もし、ぜひというのがあれば1件お受けします。

今、2つ、手が挙がっていますので、お2人の方に。所属と名前が聞き取りにくいのでよろしくお願いします。

（Q） 電気通信大学の湯川と申します。非常に露骨な質問をしますが、京大がFDに目覚められた一番大きい理由は何ですか。

（荒木） 私がお答えをすればいいのかどうかわかりませんが、FDに目覚めたのは、いつごろかというのは外部の方はご存じないと思いますが…。

（Q） それは3年くらい前ではなかったかと思います。

（荒木） いいえ、工学部の場合は10年くらいの歴史を持っています。工学部の目標というのは、博士課程を出るところで、世界の、我々教官が論文発表しているようなジャーナルに自分で論文が書ける、そこまで持つていくことです。逆算して修士、卒研のレベルを設定し、それを下げていません。下げていませんが、実をいうと、入ってくる学生の基礎学力がかなり下がっています。それ以前に意欲が下がっています。1990年代の最初ごろから、そういう事実を京大工学部の皆さんは実感しておられました。卒研をやらせ、少なくとも8割は国内の学会で発表させていました。特許に関連すること以外は学会で発表させます。それで修士になれば、成果を国際会議に出す、10のうち8か9を目指しています。それをやるためにはかなり特訓をしなければいけなくなったというのが、90年代の最初くらいでしょうか。

そのころから工学部の中ではなんとかしなくてはいけない、何をやったらいいかという議論が盛んになりました。それで動機づけをしなければいけないとか、いろいろな調査研究をしました。90年の学生アンケートから始まって、実質的内容を伴うようになったのは、ここ5年ぐらいです。

で、御質問に対するお答えですが、FDの必要性を感じ出した一番大きな理由は、学生の質が変わってきたことの認識とそれについての危機意識です。

（Q） 三井造船の吉長と申します。私は企業に勤めています。

私自身の経験から、実際に企業や、いろいろな職場で経験をしたあとに、もう一回大学で学ぶというのは、本人の問題意識がもともとあるので、非常に教育効果が上がると思っています。私自身も、私が住んでいた地域に国立大学があるのですが、夜間学部を持っていたので週に1度、結局、10年間ほど通った経験があります。それから、つい最近ですが、地元で県立大学ができて、ドクターコースに3年間通い、学位も取得させていただきました。働きながらも大学に通うという、私自身もいい経験をしてきたのです。やはり企業の方も考えなければだめだと思うのですが、やはり大学の方も、社会人に対して学ぶ機会を広げていくことが大切ではないかと思っています。具体的に、今日の話題提供者の先生の中で、社会人に対して大学を学ぶ場として開かれているような動きがありましたら、教えていただきたいと思います。

（荒木） 赤岡先生、一言、お願いします。

（赤岡） それは情報が伝わっていないのだと思いますが、京都大学を含め、国立大学もいろいろなところでずいぶん社会人を受け入れています。それからもう1つは、RENAという民間団体があり、大学展を毎年やっています。そこで社会人を受け入れている大学のリストアップ、あっせんを組織的にやっています。今はずいぶん、熱心になっています。

また、大学院2年間（マスターコース）への社会人の受け入れは、全国各大学、非常にやっていると思います。私のところでもそうですが、経済学研究科でも60歳、50歳を過ぎてからお越しになっている方が現実におられます。その中には本当に勉強がしたくて勉強だけをなさっている方もいますし、博士号を取って研究者になられた方もおられます。ですから、それはずいぶん開かれているという気がします。

（荒木） よろしいですか。それでは一応、ディスカッションの時間はこれで終わらせていただきます。

閉 会 の 辞

荒 木 光 彦（京都大学高等教育教授システム開発センター長）

赤 岡 功（京都大学前副学長・経済学研究科教授）

（荒木） だいぶ遅くなってしまいましたが、少しだけご挨拶を、私ではなく別の方をお願いします。

9回のフォーラムを京都大学の高等教育教授システム開発センターとしてやってきました。このセンターがこの4月から発展解消します。先程、教養教育の改革と総長がお話になりましたが、「高等教育研究開発推進センター」というものに発展解消して、その中の「高等教育教授システム研究部門」に、今のセンターは位置づけられます。非常に大きなサイズと目的を持った新しいセンターに発展的に解消するものです。4月からそのセンター長をなさる予定の赤岡先生に閉会の辞をお願いします。

（赤岡） 少しお話ししたい点がないわけではないのですが、時間がかなり超過していますので。今日は非常に良いお話を聞かせていただいて、ありがとうございます。先程から批判ばかりで、いい点がないというご意見もありましたが、本間さんは「ここへ集まっていることがとても良いことだ」とおっしゃいました。しかし、いささか平均年齢が高いような気はします。平均年齢を高くすると日本人はりっぱだというのが通例ではありますが、そうでないお話もしたいのです。それはまた懇親会でということにさせていただきます。

今、荒木先生からそのようなようにおっしゃっていただきました。私は、そのような大きな仕事をしなければならないのですが、荒木先生、皆さん方のご協力を得まして10回目をさらに盛り上がるようなかたちに持っていきたいと思いますので、皆さん方、来年、ぜひまたお越しいただきたいと思います。それぞれの方がお1人でもお2人でもお連れの方を連れてきていただくと1000人になりますので、そう願います。今日は、このフォーラムそのものを閉じたいと思います。ありがとうございます（拍手）。